

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 21 日現在

機関番号：33937

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：平成 22 年度～平成 24 年度

課題番号：22500554

研究課題名（和文） 幼児の身体表現力を豊かに育てる教育方法の提案

研究課題名（英文） New Teaching Method for Fostering Rich Physical Expression of Children

研究代表者 古市 久子(FURUICHI HISAKO)
(愛知東邦大学・人間学部・教授)

研究者番号：10031684

研究成果の概要（和文）：幼児の身体表現力を豊かに育てるために、コミュニケーションの双方向性を活用した新しい教育方法を提案した。それは誰でも、どこでも、いつでも、どんな年齢の子どもにもできる方法である。まず、現場の調査を行い、身体表現に関する保育者の考え方を「子どもの表現に対する理解」と「保育者の悩み」から分析した。これらの資料を基に教材の作成を行い、その効果を現場で実証した。その結果、身体表現に関する教科書を作成した。

研究成果の概要（英文）：To foster rich physical expression of children our study suggested a new method with interactive communications. The advantage of this method is that it can be applied anytime at anywhere for any ages of children. Based on the questionnaire result, we found nursery teachers' attitude toward physical expression in point of "Understanding of Children's Expression" and "Worries of Nursery Teachers." In addition we created various teaching materials and tested their validity in nursery schools and published a textbook for physical expression as the findings of this research.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・身体教育学

キーワード：幼児教育・身体教育学・保育内容・身体表現・双方向性

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来の身体教育学・幼児教育学分野の研究は技術獲得に関するものが多かった。本研究は心のやり取りから身体表現を引き出すことに興味がある。坂上(1999)の「歩行開始期のやり取りの研究」や、森下(1999)の「運動能と遊び空間の認知や愛着が影響し合う研究」がヒントになった。

(2) 従来、子どもの心に渦巻くものを引き

出すという高度な理念が身体表現の指導を硬直させていた。本研究は「引き出す」ものではなく、自然と身体動くような状況を作ること考えた。本研究は高野(2000)の「イメージを展開させ表現する研究」、砂上(2000)の「動く行為がイメージを生みそれがまた身体を動かす」ということから、双方向性の連鎖のヒントを得る。

(3) 身体表現の一つの条件として喜多

(2002)の「環境からの刺激に即興的に行動する身体があること、つまりコミュニケーションが表現を思考させ成立させる」ことが身体表現の双方向性を説明できる理論であるとして、それを取り入れた。

(4) 環境と子どもの身体の双方向性を示す論文はあるが、環境が子どもに及ぼす影響と捉えられている。森(1999)は「幼児の「からだ」の共振が自然とその遊びの集団の一部になっていく」ことや、高野(2003)の「子どもの中から生まれるリズム」の展開の例は双方向性の関係を示していると考えた。

(5) 内藤(2006)の「子どもの身体表現と保育者のもつ専門性の関係」から、子どもとの間に介在するやり取りが保育者の態度により、豊かに発展することがうかがわれた。

(6) 遠藤(2002)の「見えるコミュニケーションと見えないコミュニケーションが身体表現に影響を与えている」という論文は双方向性そのものの有効性を語っていた。

以上のように、身体表現は人または環境との関係性のなかで起きる双方向性のやりとりと考えることがその指導にあたっては有効な方法であると考え、テーマを設定した。

2. 研究の目的

本研究は、幼児の身体表現力を豊かに育てるために、コミュニケーションの双方向性を活用した新しい教育方法を提案するものである。誰でも、どこでも、いつでも、気負いを感じず、実践できることが条件である。

まず現状を調査し、そこから豊かな身体表現につながるものを抽出し、新しい教材作成に生かす。作成された教材を現場で実践してその効果を検証した結果を反映したテキストを作り、現場への普及を図るのがこの研究の目的である。

この研究の特色は身体表現力を育てるために、コミュニケーションの双方向性を活用するという手法を用いていることである。

3. 研究の方法

(1) アンケート調査

日時：平成22年10月～12月

調査対象：愛知県・大阪府・福岡県の公私立幼稚園・公私立保育園の各50園の計600園を無作為に抽出し、郵送で調査を行った。

回収率：回収数は207部で回収率は34.8%であった。

調査内容：①フェイスシートは勤務園の公私立別・性別・年齢・勤続年数②子どもが身体表現することについて保育者はどのような点を重要視しているかについて、35項目の質問を設定した。項目のそれぞれについて「とても重要視している」～「あまり重要視していない」までの6件法で行った。③身体表現の指導については10項目で、保育者が悩ん

でいることに関する調査を行った。

(2) 実践調査：名古屋市・大阪市において延べ29回行った。詳細は表1のようである。方法は現場に出向き、身体表現の場面をビデオで撮影し、それを分析した。

表1 保育現場での観察と実践調査の回数

年	年齢	場所	回数
2011	2歳児	名古屋・大阪	6
	3～5歳児	大阪	8
2012	1歳児	名古屋・大阪	2
	2歳児	名古屋・大阪	7
	3～5歳児	大阪	6
合計			29

内容は従来のものに工夫を加えた教材、アンケート調査に基づいて作成された新しい教材等を使用した。

(3) インタビュー：1歳児をもつ母親、2歳児をもつ父親からの聞き取りを行った。3歳以上については福山市の私立A幼稚園において前年度実施された身体表現に関する指定研究についてインタビューの調査をした。

(4) 調査結果を踏まえて、教科書の作成を行った。

4. 研究成果

(1) アンケート調査の結果より

①成果1：「子どもの表現が何か」について保育者の考えていることが明らかにされたこと。そのことにより、今まであいまいであった幼児期の表現が行動の言葉で示され、指導の焦点が絞れる。

因子分析の結果、「子どもの表現の理解」については3つの因子「自己の成熟と他者との関係」「決まった型のある表現」「生活を通しての表現」が抽出された。3つの因子の詳細は表2の通りである。(学会発表④)

表2 身体表現に関連する保育実践において重要視していること

第1因子： 自己の成熟 と他者との 関係($\alpha =$.912、平均値 4.33)	<ul style="list-style-type: none"> ・友達から友達へ表現が広がる ・自分で創造的な表現を考える ・友達との関わりが増える ・自分なりの表現ができる ・友達同士で表現を見せ合う ・自分でリズムを作り出す ・恥ずかしがらずに表現する ・表現することに熱中する ・同じ表現をすることを楽しむ ・自分の世界に入っていく
第2因子： 決まった型	<ul style="list-style-type: none"> ・曲に合わせて踊れる ・少しずつ表現が上手になる

のある表現 ($\alpha =$. 824、平均値 4.36)	<ul style="list-style-type: none"> ・上手にできたことを喜ぶ ・集団でそろって動く ・お話の場面を演じる ・大きく表現できるようになる
第3因子： 生活を通しての表現 ($\alpha =$. 845、平均値 4.36)	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の代わりに身体表現する ・体験したことを再現する ・保育者に表現を見せに来る ・生活の様々な出来事から刺激を受け表現する

②成果2：保育者の悩みが明らかにされたこと。これは悩みの言葉ではあるが、同時に、指導のポイントでもある。今まで漠然と指導の難しさを訴えていた保育者の悩みを具体的に解決につなげる糸口を見つけたことになり、身体表現の指導では非常に有効な方向性を見出したことになる。

保育者の表現における悩みについては「活動と保育者の援助」と「課題のある子どもへの対応」という2つの因子を得た。それぞれの因子の詳細は表3のようである。

表3 身体表現の指導における保育者の悩み

第1因子： 活動と保育者の援助 ($\alpha =$. 867、平均値 3.54)	<ul style="list-style-type: none"> ・年齢に応じた指導の仕方 ・どのような言葉かけをするか ・活動内容が単一になりがち ・子どもに寄り添いどのように表現を引き出すか ・どのようにしたら出来上がりがよくなるか
第2因子： 課題のある子どもへの対応 $\alpha =$. 809、平均値 3.54)	<ul style="list-style-type: none"> ・表現することを恥ずかしがる子どもへの対応 ・身体表現が得意な子どもにどう対応するか ・控えめではあるが表現する子どもへの対応 ・キャラクターものばかりの子どもへの対応

子ども自身の成熟と共に、友達との関係を通しての身体表現を重要視し、決まった型のある表現や生活を通しての表現から子どもの身体表現を育てている保育者の姿がうかがわれた。保育者からは多種多様な悩みが見られたが、特に「年齢や一人ひとりの子どもに応じた身体表現の指導・援助」や「子どもの心に寄り添った、楽しい指導・援助の在り方」についての悩みが見えてきた。(論文①・学会発表③)

(2) 実践調査の成果

①成果3：双方向性の典型的な例を提示で

きた。これは双方向性の必要性や効果をすぐに確認できることで、保育者が双方向性の意味を理解し、自信を高められる。

ここでは、2歳児を対象とした成果を記す。その理由はi 集団生活に入る前段階として興味ある年齢であること、ii 自分の身体に正直な2歳児に適切な教材を見つけることの意味があること、iii 2歳児向けの教材が少ないこと、iv 双方向性が顕著に示される年齢であることなどの理由による。

2歳児の親子のふれあい遊びの実施と観察を分析した結果は表4のようである。

表4 2歳児における双方向性の特徴

目的	身体表現	観察されたこと
大小がわかる	「大きな栗の木の下で」他	<ul style="list-style-type: none"> ・大小の表現は容易にできる ・絵本のテキストには声を出しながら同調
身体が動く	「ぴよんたのたいそう」他	<ul style="list-style-type: none"> ・絵本の主人公に合わせて体を動かす ・オノマトペに合わせて身体を動かす
感じる	「汽車ごっこ」他	<ul style="list-style-type: none"> ・状況により同じ表現でも動きを変える
数を数える	「あおむしでたよ」他	<ul style="list-style-type: none"> ・リズムカルに数を数えることができるようになる
言葉を増やす	「こぶたぬきつねこ」他	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉に合わせて動きをすることができるようになる
想像する	「げんこつ山のたぬきさん」他	<ul style="list-style-type: none"> ・たぬきさんの住んでいる所を聞くとげんこつを覗いて、「げんこつの中に見える」と答える

2歳児において、ふれあい遊びによる双方向性もたらす効果については以下のようなことが見られた。

- ・大小の表現はどの子どももしっかりと表現でき、楽しむことができた。それを親と確認し合うことで次への動きに発展できるのでより楽しみが増したと考えられる。

- ・母親との交流により身体の表現が引き出される。それは母親を真似ること、母親が手を取って動かしてくれることで、自分の動きが心まで動かし、コミュニケーションしていると思ってしまうからであろうと考えられる。

- ・環境に触発されてリズムカルな動きが行われたがこれは本能に近い喜びであろう。

- ・時間の経過と共にこの教室に来ることが楽しみになり、身体表現に対する興味が増した。

体験を重ねることで「楽しい」というファイルのなかに身体表現のイメージが増えていったことが、子どもの動機を高めたものと思われる。

以上、子ども・母親・調査者・環境においても双方向的なかかわりの効果が見られた。(論文②・学会発表①)

③成果4：異年齢間の双方向性については、互いを思いやる、特別なやり取りが見られた。そのこと自体は従来も観察されていることであるが、双方向性の観点から、互いの影響に視点を置くことで、動きへの指導に応用できるポイントが考えられた。

異年齢集団におけるふれあい遊びの相互の関係性については、年長児は見通しを持ち、遊びを継続させようという意識や、自分より小さな他者への配慮という柔軟な調整力が観察された。年少児は年長児の真似をしているように見えても、自分なりに全身を使って自由に表現し、天真爛漫な表現になり、年長の子どもたちに影響を与えながら、互いの表現にやり取りがあり、新しい動きに発展していくことが分かった。年齢の違う子どもの間でも双方向的な関係が身体表現を豊かに発展させた。(論文③)

④子ども同士の互いの影響について

成果5：具体的な関係性が双方向性を強化できる例を示すことができ、指導の一つとしてヒントを提示できた。

手をつなぐ行為に着目して検討をおこなった結果、提示者の遊びを基に個別的な遊びへの展開がみられること、また子ども同士の関わりで遊びが瞬時に変化していくこと、それを受けて、提示者が個別的な遊びを全体への遊びへと提案しているなど、子どもたちと提示者の関係において双方向的な遊びの進め方が見られた(論文④)。

以上のように、異年齢間、友達同士の双方向的なやり取りが身体表現を豊かにしていく。

⑤教材を作成し、それを現場で実施した。

成果6：実践の検証に基づく教材の作成ができた。このことは、実際に指導に当たる保育者に一つの手法を示すことができ、身体表現を苦手とする者にも利用できるし、教材の提供だけの書籍が多いこの領域で、指導の手掛

かりを示すことができた。

教材の作成とその実践調査では、豊かな動きを行うためには、幼児の身体表現を妨げている「恥かしさ」を取り除くことでもありという仮説の検証も含んでおり、調査者が講座を行い、また幼稚園・保育所に出向いて実際に実践を行い、効果を確認した。さらに、年齢別による課題の抽出や集団の大きさを多様に変えて観察したことも課題を抽出することに役立った。その結果、双方向性について以下のような内容にまとめることができる。

- ・身体表現は双方向性のやり取りの中で育つ。
- ・双方向性は表現するときの恥ずかしさから脱却できる手法となる。
- ・真似るは双方向性の第一歩であり、身体表現の大きな側面である。
- ・表現することは自分の位置を確認しつつ、自分の表現を柔軟に見直していく。(学会発表②・⑤)

以上の結果は、コミュニケーション的なやり取りに注目することで、身体(心)をさらけ出すことに躊躇することなく、自然に身体表現を行ってしまうことを示している。身体表現を行うときに子どもにとっての困難はまずは身体を動かすという「表現の壁」を乗り越えることである。それをコミュニケーションに視点を置くことで夢中になり、従来から言われてきた身体表現の「心の解放」が行われる瞬間になるのではないだろうか。

身体表現の豊かさの育成は、今まで保育者の指導態度が大きくかかわっていることが確認されているが、双方向性の考え方は、保育者のプレッシャーを低くし、子どものモチベーションを上げるものとなる。

(3) インタビュー

インタビューでは集団保育の指導方法について、日常保育でのやり取りの大事さというキーワードも得た。「子どもの心を引き出す」という従来の方法では、保育者を緊張させて子どもにまで影響を与えることを聞き取っている。以上のことを総合して身体表現は「子どもの心を引き出す」ことにとらわれるのではなく、「子どもの身体による双方向的な対話体験」の方が、より豊かに表現でき、かつ楽しんで続けられるという仮説を裏付ける結果となった。保育者は自然にこの方法を見出して行っている例を見た。また、身体表現に注目している園は子どもの身体表現力により影響をもたらすことも確認した。

これらは従来から感じられた結果ではあ

るが、実際に取り組んできた園の記録より、確証を得た。

(4) 教科書の作成

①成果7：保育者養成の時から使用できる教科書を作成した。「保育表現技術」の教科書は今までないので、養成校での使用で学生の表現力を伸ばすことができる。

以上の調査結果から、教科書の作成にあたって、必要な項目を挙げた。これはこの研究にあたった全員が5回にわたって検討したものである。(表5参照)(図書①)

表5 教科書に必要なことと教科書の内容

必要だと考えたこと	教科書の内容
・保育者の不安を除くために、身体表現の発達の様子を知る必要があること	・豊かな身体表現とは ・身体表現の発達に関する理論
・身体表現力は周囲の影響を強く受けることから、身体表現を指導する者の表現力を高める必要性があること	・身体表現の基礎力を高める ・保育者の重要視していること・悩み
・現場での実践調査により、子どもにとって有効な教材例を示す	・子どもと身体表現 ・身体表現遊びの指導
・家庭でのふれあい遊びが後の身体表現に続いていくことから、乳幼児期の体験が必要であること	・子どもが喜ぶ身体表現の教材
・身体表現は導入の指導が難しいことから、保育現場で使える指導案が必要であること	・身体表現についての指導案
身体表現の位置付け	・保育所保育指針 ・幼稚園教育要領

<研究のまとめ>

調査の一つ一つは小さな試みではあるが、これらを統合して、双方向性というベクトルを導き出し、身体表現の新しい見方を提案するとともに、子どもの豊かな身体表現をいつでも、だれでも、どこでも育てられることを発信できたことが大きな成果であった。

<今後>

この研究は、「双方向性の指導法を広めること」がこれからの仕事になる。そのための方策として次のような展開をしていきたい。
①養成校の時代より、双方向性の考え方を基本にして学修を進める。

保育所保育指針や幼稚園教育要領に書かれている内容については、現場での浸透・養

成校の授業などでしっかり伝えられるようになってきた。しかし、その教材や指導方法は子どもに直接関係する保育者の力量にかかっている。保育者の養成校が学生の表現の力量を高めるカリキュラムを考えるまでになることを望む。そのためのアイデアも提供していきたい。

②研究をさらに重ねて学会で発表する。

研究方法の難解さが身体表現の研究の進展を遅らせていたが、関係性をパターン化する、事例のカテゴリ分析など、より客観性を高める方法を実行する。

③学会においてシンポジウムを開催する。

2011年5月にはシンポジウム「身体による表現をどう捉えるか」(日本保育学会)を行っている。これは双方向性にかかわる論点から行なった。今後は実際の効果についての提示を行い、社会にその有効性を投げかけたい。

以上、この研究成果を生かしてヒトの身体教育に寄与することを続けていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 田辺昌吾「身体表現の指導の現状に関する研究—保育者が指導する上で重要視している内容について—」四天王寺大学紀要、第54号、271-279頁、2012年、査読有
- ② 遠藤晶・松山由美子・内藤真希「対話的な手法によるふれあい遊びの実践—幼稚園2歳児クラスの表現遊びを通して—」武庫川女子大紀要(人文・社会科学)、59巻、21-29頁、2012年、査読有。
- ③ 遠藤晶・松山由美子・内藤真希「幼児の異年齢集団によるふれあい遊びにおける相互行為の検討」武庫川女子大紀要(人文・社会科学)、58巻、23-31頁、2010年、査読有。
- ④ 遠藤晶・松山由美子・内藤真希「ふれあい遊びにおける双方向性～手をつなぐ行為に着目して～」武庫川女子大学教育学研究論文集、6巻、21-29頁、2011年、査読有。

〔学会発表〕(計5件)

- ① 遠藤晶「幼児の身体表現を喚起する補助行為について」日本保育学会第56回大会、2012年5月4日、東京家政大学。
- ② 遠藤晶・古市久子・松山由美子・田辺昌吾・内藤真希「幼児の双方向的な関係がもたらす身体表現の発達プロセス」日本発達心理学会第23回大会、2012年3月10日、名古屋国際会議場。

- ③ 田辺昌吾・江原千恵・内藤真希・古市久子・遠藤晶・松山由美子「身体表現の現状に関する調査(1)－子どもの表現理解より－」日本保育学会第64回大会、2011年5月21日、玉川大学.
- ④ 松山由美子・古市久子・遠藤晶・田辺昌吾・江原千恵・内藤真希「身体表現の指導の現状に関する調査(2)－保育者の「表現」における悩みより－」日本保育学会第64回大会、2011年5月21日、玉川大学.
- ⑤ 古市久子・松山由美子・内藤真希・江原千恵・松山由美子・田辺昌吾「ふれあい遊びの双方向性をもたらす身体表現の効果」日本発達心理学会第22回大会、2011年3月26日、東京学芸大学.

〔図書〕(計1件)

- ① 古市久子編著・田辺昌吾・江原千恵・内藤真希・松山由美子・遠藤晶『保育表現技術』ミネルヴァ書房、2013年、pp. 3-175.

〔その他〕(計1件)

- ① シンポジウム
 幼児の「身体による表現」をどう捉えるか
 企画者・司会：古市久子
 話題提供者：鈴木裕子・遠藤晶・高野牧子
 話題提供者：平井タカネ
 日本保育学会第64回大会、玉川大学、2011年5月21日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

古市 久子 (FURUICHI HISAKO)
 愛知東邦大学・人間学部・教授
 研究者番号：10031684

(2) 研究分担者：

遠藤 晶 (ENDO AKI)
 武庫川女子大学・文学部・准教授
 研究者番号：30353006
松山 由美子 (MATUYAMA YUMIKO)
 四天王寺大学短期大学部・保育科・准教授
 研究者番号：90322619
内藤 真希 (NAITO MAKI)
 武庫川女子大学・文学部・非常勤講師
 研究者番号：10449580
田辺 省吾 (TANABE SHOGO)
 四天王寺大学・教育学部・講師
 研究者番号：00512831

22年度のみ参加（育児休職のため）

江原 千恵 (EBARA CHIE)
 姫路獨協大学・医療保健学部・准教授
 研究者番号：40399134